

富士吉田あれこれ

堀と川

「川」の意味を辞書で引いてみると、「地表に集まった水が、傾斜した陸の窪んだ所を流れるもの」とあります。一方、「堀」を同様に調べると、「地を長く掘って水を通した所」とあります（『日本国語大辞典』）。しかし、どうも市域では、上記のような一般的な「堀」とは別の意味で「堀」を認識してきたようです。もう数年前になりますが、博物館への問合せのなかに「富士山の八百八沢を表現するのに、北麓ではどうして沢を堀と呼ぶのか」と質問されたことがあります。富士山には無数に沢筋があることから八百八沢とも呼称されますが、この富士吉田では何故、沢を堀と呼ぶのか、そのときにはっきりと返事をする事ができませんでした。そのことで改めて、堀を意識することになりました。ここでいう「堀」は「雪代堀」のことで、雪代水、つまり富士山の雪がとけてきた水が流れ出て、



■西堀と呼ばれていた宮川の流れ

それが勢いを増して山麓の火山性扇状地を掘り込んで窪地となり、沢が形成され、それが雪代堀となっていくといえるでしょう。雪代や大雨の際には流水が認められるものの、普段はまったく表流水のない空堀でした。明治27年(1894)の『山梨縣市郡村誌』には河川と並んで空堀の項目が設けられて記載されています。このような空堀は、富士川砂堀（滝沢堀）、儘堀・村間堀（現、間堀川）、神田堀（現、神田堀川）、大堀・西堀（現、宮川）、が代表的なものです。

これらの堀とは分けて、常に水の流れのあるものを富士吉田では川と呼んできたようです。川の代表として、市内を流れる一番大きなものが桂川です。山中湖を水源として北西へ流れ、市の南端部で流れを北東に転じ、市街地東部を流下しています。そして都留・大月市を経て、下流の神奈川県に入るとその名前を相模川と変え、河

口付近では馬入川と呼ばれることもあります。桂川は、上流域にあたる市域の中で、嘯川、宮川、小佐野川、数見川などの支流を集めて、次第に大きな川になっていきます。

当博物館付近で、桂川を引き入れた鐘山堰、その下流の用水堰、また、鐘山堰の用水を流す山岸川（現、中沢川）、山岸川の水を引水する山口堰、東方で山岸川の水を引く横溝堰などがあり、これらも水の流れがあることから、広く「川」と称されてきました。大溝川も同じように用水を流す川であって、比較的早く開削されたものを、ここでは「溝」と称してきたようです。

ところで、雪代は当市にとってはやっかいなしろもので、古来より繰り返しその災害に見舞われてきました。近年では今から45年前の昭和36年(1951)4月に雪代による洪水が発生し、市内の下吉田地

区の宮川沿いに大きな被害をもたらしました。富士山内で融雪により発生した雪代水は、しばしば市街地を襲うため、これらの堀を深く浚渫して整備していくことが災害から町を守るために昔からのおこなわれている治水事業のひとつでした。堀は、本来は自然による富士山体やその山麓地を削り込んだ地形を指したものでしたが、人が少しずつ手を加えることによって自然を管理し、さらに大規模に深く掘削することで発展したと考えられます。そして、河床をコンクリートで覆ったことによって、わずかな流水も浸透せずにそのまま流下するようになったので、間堀川や神田堀川は、単なる「堀」ではなく文字通り「川」となりましたが、堀の名称が残ったまま川として存続しています。

(布施光敏)

千葉県市原市の富士講

—平成18年度 外川家住宅学術調査経過報告—

はじめに

MARUBI26号に引き続き、上吉田の御師住宅、外川家の学術調査の経過を報告します。昨年度の古文書の調査では、外川さんが富士山のお札の配布先を記録した「配札控帳」が数年度分みつかりました。外川家の配札帳は、昭和12年度のものが市史の調査でも取り上げられています(富士吉田市史編さん室『上吉田の民俗』1989)、今回の調査ではそれ以前にさかのぼる帳面も確認されました。具体的な内容の検討はこれからになります。

これらの配札帳を紐解くと御師である外川家は、千葉県を中心に、多くの富士講が富士登山をするときの宿の世話をしていたことがわかりました。そこで18年度の民俗分野の学術調査では、帳面に記されている千葉県の土地を訪ね、外川家に関わる富士講の活動について調査することになりました。調査は富士講の行幸に合わせて6月25～27日に行いました。



■外川家の御師と千葉県(木更津)の講社(昭和30年)
【左上、白いビザの人物が外川家の御師 外川鶴直】



■千葉県における外川家の旦家分布図
(『上吉田の民俗』より)
【○印は旦家】

御師と旦家

特定の御師が世話をする関係にある家を旦家(壇家)といいます。さらに、旦家が住んでいる土地を旦那所(檀那所)といいます。配札帳に載っている地名の場所は外川家の旦那所になります。千葉県では市原市内の地名が多く記載されていました。

旦家は、夏の登山や火祭などの行事に富士吉田にやってくる、毎年決まった御師の家に宿泊するという習慣がありました。またその折に、御師に富士山のお札を刷ってもらったり、祈祷をしてもらったりしたようです。一方、御師の側でも、年に一度旦家回りといっ

て、旦家の住んでいる土地を訪問して富士信仰の布教活動をしていました。これ以外にもさまざまな交流を通して御師と旦家は親密な関係を保ってきたと考えられています。

外川家の場合には、どのような交流があったのでしょうか。外川家は昭和40年代には御師を廃業していますが、外川家の旦家だった家々は、その後、富士登山や富士山の信仰をどのように続けてきたのでしょうか。

千葉県市原市の富士講
 —平成18年度 外川家住宅学術調査経過報告—



■カンドコ



■カンドコの神札

【三山講の札の上に富士山の札が貼られる。】



■のぼり旗／天保六年(1835)

市原市松ヶ島浅間講

外川家の旦那を追って、まずは市原市松ヶ島に向かいました。ここはかつて、海苔の養殖やアサリ漁がさかんな漁村でした。松ヶ島という地名は昭和3年の配札帳にも記されています。この地域では富士講のことを浅間講といい、代表者をヤドロクといいます。現在のヤドロクの齊藤さんのお宅にうかがうと、座敷の壁にお札が貼ってありました。いまでも富士吉田から送ってもらっている富士山の札です(MARUBI26号参照)。松ヶ島の浅間講に宛て、一括で郵送してもらい、春の講祭りで講員に一枚ずつ配られます。札が貼ってある壁は、上に神棚、向かって左に仏壇があり、床の間の前身である押板になっています。このお宅ではカンドコ(神床)と呼んでいました。

富士山のお札の下に重なって見えるのは、出羽三山のお札です。出羽三山を信仰する集団を松ヶ島では三山講といいます。三山講は

千葉県のこの辺りでは富士講よりも盛んに信心されている代参講(※)です。

この松ヶ島の調査で、地域の講に伝わる古い道具を拝見することができました。特に「天保六年(1835)四月初申」と書かれたのぼり旗は古く貴重なものでした。講の持ち物である旗にはへの印の下に「包」という文字を合わせたかざしるし等印(富士講のマーク)がついています。これは山包という富士講の流派の印です。この旗は、春先に行われるセンゲンサンの祭りにたてていたようです。古くから富士山の信仰が続いていた証といえます。しかし、今は富士山を信心する浅間講の講員の数も減り、めったに富士山に登らなくなったそうです。

※代参講とは講の代表者が遠くの社寺霊場に詣でて、お札を受けてくるもの。江戸時代から盛んになった。伊勢参りや熊野詣など。



■講社に代々伝わる鈴
 【登山時に腰に下げる。】

市原市八幡の丸八講

次に調査した地域は、市原市八幡です。ここも外川家の配札帳に記載がある土地です。講社は丸八講といい、今でも吉田の火祭などで富士吉田市を訪れています。丸八講の中には山包正講の濱本講社と、山水講の観音町の講社があります。同じ丸八でも、濱本町は外川家、観音町は同じ上吉田の別の坊の旦那家です。この2つの講社はツキナミと呼ばれる月ごとの集まり（観音町は1・5・9月のみ、濱本町は7・8月を除く毎月）以外に、7月のお山開き（富士山の登山解禁）の直前の旧暦6月1日に、そろって地元の富士塚で例祭を行います。今回はこの祭りを見学させていただきました。

平成18年の旧暦6月1日は新暦の6月26日にあたりました。祭りの名称は「平成18年度浅間神社例大祭」。神事は通例飯香岡八幡宮の本殿に隣接した富士塚で行ってますが、この日はあいにくの雨で、飯香岡八幡宮の拝殿で執り行われました。拝殿内には富士塚の方角に向かって祭壇が設けられ、供物が並べられました。白い行衣を着た講員たちがその前に座し、八幡宮の宮司さんが祝詞や玉串を奉げず一通りの神事を終了しました。その後講員たちだけで残り、先達（※）が「浅間神社大祭拝詞」を詠みあげました。

※先達 講の指導者のこと



■例大祭の神事



■八幡の富士塚

八幡の富士塚

富士塚というのは、富士山の形に似せて岩などを円錐状に積んだ塚です。かつては、富士山に登ることが許されなかった女性や足の衰えた老人が富士登山のまねをしたり、集落の祭りの場に利用されたりしました。市原市内には57カ所、各集落に1つずつというくらい多くの富士塚があります（富士市立博物館「富士塚調査報告書」1996）。

市原市の中では、八幡の富士塚は特に大きく立派で、高さ35m径15mと報告されています（前掲書）。多くの富士塚に見られるとおり、塚の表面はごつごつした黒い溶岩

で覆われています。地域で伝えられた話で、「ボク」と呼ばれる富士の溶岩を山梨から千葉まで運んで積み上げたとされています。さらに、各合目ごとに道標を立て、小御岳神社や頂上の浅間神社の場所には石碑を立てて、実際の富士山に登った気分を味わえます。特に八幡の塚は表現が細かく、富士講の聖人である食行身縁がこもったという烏帽子岩のむろには、小さな身縁の像も再現しています。昔の祭りでは、木花開耶姫の神輿が道標の道順にそって塚を登り、頂上で神輿を回転させるのが見ものだったそうです。

千葉県市原市の富士講 —平成18年度 外川家住宅学術調査経過報告—

古い写真を追って

外川家からは、千葉県の写真館で焼付けされた古い写真がたくさん出てきました。おそらく交流のあった講社から送られてきたものなのでしょう。今回の調査ではその写真の複製を持参し、写真の場所や人物、背景などの情報をできるだけ集めるよう試みました。調査先で尋ね歩いた結果、中には場所や人物を特定できたものもありました。

右の写真は、現在の市原市五井にある大宮神社の境内の富士塚の前で撮られた大正時代の集合写真だと判明しました。左端の人物は富士講のグループ名「五井講社」の字が染め抜かれた法被を着ています。また、右端にいる白いひげを生やした男性は、外川家の御師「外川登」だということも分かっています。

富士塚に立てられた石碑によると、五井では大正9年(1920)に富士塚を修築し、10月23日にはその開山祭を行ったようです。石碑には修築にあたって金銭を出資した人名が刻まれていましたが、その中には「外川登」の名もありました。



■五井の富士塚修築記念（大正9年10月23日）
 【右端の人物は当時の外川家の御師・外川登。】



■現在の五井の富士塚
 【上の写真に比べると木々が残っている。】



■富士塚石碑の刻字
 【一金貳拾円外川登】

濱本講社の火祭

前述の濱本講社では、毎年8月26日の「吉田の火祭」に、市内上吉田の筒屋という御師の宿に泊まります(富士吉田市教育委員会『吉田の火祭』2005)。昭和30年代ころまでは外川家に宿泊していましたが、外川家が御師をやめたので宿を変えました。

平成18年も、濱本講社は火祭に合わせて参詣に訪れました。かつては列車を乗り継いで来ていましたが、今は大型バスでやってきます。日中は、五合目小御嶽神社にお参りしてから、3時頃に北口本宮富士浅間神社にバスで到着、本殿への参拝を行い、行衣へ御朱印をもらいました。

夕方、筒屋に坊入りした濱本講社は、持参したマネキを筒屋の入口に下げました。これは宿泊中という印です。筒屋の中門に下がっている提灯は、数年前に濱本講社が筒屋に奉納したものです。むかしから、講社はお世話になる御師の家に様々な生活道具を寄進します。外川家にも丸八講の印のついた道具が確認されています。

筒屋には濱本講社以外にも神奈川県横須賀市の丸伊講や同県横浜市の丸金講神奈川講社、神道扶桑教上尾月三教会などが現在でも宿泊しています。



■行衣に記された様々な印章



■浅間神社で行衣に印をもらう



■筒屋の中門

【下がっている提灯は濱本講社が奉納したもので、「濱本講社平成十六年七月吉日」と記されている。】



■マネキ

千葉県市原市の富士講 —平成18年度外川家住宅学術調査経過報告—

朝の拝み

翌朝8月27日6時過ぎ、筒屋では、泊まっている講社が合^{あが}同で拝みを行いました。丸伊講の齊藤先達の主導で講員たち全員が、みんなで参加する儀式です。

拝みにあたっては、塩を盛った上に線香を富士山の形にのせます。線香に火をつけ、まじないの書かれた護符に火をつけて空にほおるお焚き上げをしたり、富士講の經典である「お伝え」を唱えたりしました。

拝みが終わると、^{しおかじ}塩加持を行います。燃え尽きた線香と塩を白い

布で包み、その塩の包みで、講員たちの体をさすったりたたいたりします。こうすることで体の悪いところが治るそうです。線香で暖められた塩は熱を持っているため、塩加持を受けると包まれた布ごしに体に熱が伝わってきます。

塩加持が終わると、濱本講社の人たちは、その塩をビニール袋に小分けにして、持ち帰ります。この塩を自宅の四方にまくと、病気や害悪がなくなるとされています。



■拝みに参加する濱本講社



■ご利益のある塩を取り分ける



■塩加持を受ける濱本講社

減っていく富士講

今回の調査で共通してきかされたことは、昔は、地区のほとんどの家が講に参加していましたし、立派な富士塚もありますが、今は講員が減って、富士山への登山も回数が減っているということです。かつて外川家の旦那所だった富士講の講社は縮小されてきているよ

うです。富士信仰にかわるように今でも盛んに行われているのは、山形県にある出羽三山を信仰する三山講です。

外川家に宿泊して、御師の活動を記憶している方々も80歳以上と高齢になり、当時のお話を聞く機会も少なくなっています。それで

も、富士講を続ける方たちは、古いしきたりをなるべく守って、講を続けていく努力をされています。今回、紹介しきれなかった講社もまだあります。

最後に、本調査に快くご協力いただきました次の方々に厚く御礼を申し上げます。(高橋晶子)

《ご協力いただいた方々》

- 飯香岡八幡宮
- 大宮神社
- 齋賀(S)家
- 齋賀(T)家
- 松ヶ島浅間講
- 丸八濱本講社
- 丸八観音講社

(五十音順)



博物館からのお知らせ

博物館のホームページをリニューアルしました！

博物館URL <http://www.fy-museum.jp>
 E-Mail hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp

このたび、当館のホームページを全面リニューアルしました。あわせてURLも変更となりましたので、「お気に入り」・「ブックマーク」にアドレスを登録されている方は、お手数ですが変更していただけますようお願いいたします。



新刊案内

富士山叢書第四集『富士に登る』

富士山叢書の第四集として「富士に登る」を刊行しました。富士山を麓から頂上まで歩いて登れるガイドブックとして編集したもので、詳細な地図と歴史解説を付してあります。

A5版／フルカラー／107頁／230g
 価格：1,000円



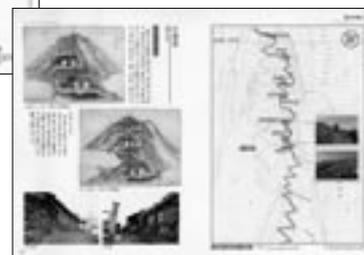
臨時休館のお知らせ

年末年始・燻蒸作業

平成19年1月4日(木)～12日(金)

年末年始に引き続き館内燻蒸および清掃作業のため休館いたします。
 ※1月4、5、8～12日の間、歴史文化課の業務は市教育委員会で取り扱います。

〒403-0301 富士吉田市下吉田1904 教育委員会3F
 TEL: 0555-22-1111 (代)



富士吉田市歴史民俗博物館

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間／午前9:30～午後5:00 (午後4:30迄入館可)
 休館日／年末年始
 観覧料／大人 300円 (団体 240円) 団体割引は20名以上に適用
 小中高生 150円 (団体 120円)
 交通案内／●中央自動車道河口湖ICより車で10分
 ●東富士五湖道路山中湖ICより車で10分
 ●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。